

院に、昭和五十六年くらいでしょうか…、出張医でお世話になったことがあります。

高木 院長になったのが昭和六十年ですから、外科部長・副院長のころですね。早いもので協会病院に来てから約四十年がたちました。

北大第二外科の助教授・青木高志先生が院長に就任されて、「外科の基礎を作ってほしい」と

誘われたのがきつかけです。定年までに入院手術七、三〇〇例ほど執刀させていただいた。

思い出深いのは、平成八年の病院新築。土地確保のための周辺住民との交渉、日本各地の病院視察、設計の熟考など、とにかく大変でした。ただ私は幸運でしたね。落札したゼネコンが破格で請け負ってくれたり、ドル安（一ドル八十

円）による公定歩合の引き下げで低い利率で借り入れもできました。

藤井 立派な病院が完成した時は感動もひとしおだったでしょう。

高木 社会事業協会の本部には「立派すぎる」と怒られました（笑）。

●問題多い後期高齢者医療制度 医師会にとって重要な時期

藤井 先生のご趣味は？

高木 碁と庭の草とりと孫の成長です。碁は日本棋院の五段で、日本棋院小樽支部長も務めています。

藤井 大変お元気な先生、健康法は？

高木 妻と一緒に一万歩ウォーキングに励んでいます。

藤井 後期高齢者医療制度のカードは送られてきましたか？

高木 もう七十七歳、「末期高齢者」です（笑）。医療費を抑制するための制度だが、将来、高齢者の受けられる医療が制限され、アメリカのように医療に市場原理を導入することだけは防がなくてはならない。

ここ数年が日医はじめ日本の医療界にとって重要な時期になるでしょう。



平成8年に新築した小樽協会病院



温かい光が差し込む吹き抜けのロビー



各階のナースステーションを経由させたランザシステムを導入

インタビューを終えて

努力と朗らかさで幸運を呼び込まれた
藤井美穂

常任理事

朗らかに冗談をおっしゃるので楽しいインタビューでした。「札幌医大産婦人科の後輩がお世話になってます」とお礼を申し上げますと、『小樽へいらっしやい。顔が利く寿可屋さんがある。値段は下げてくれないが、とびきりのネタをご馳走します』とお誘いを受けました。楽しみにしております。

幸運の連続だと謙遜されていましたが、戦中・戦後の混乱期を乗り越えられた努力の結果と拝察します。

●援農と菜園で
授業どころではなかった

藤井 昭和六年生まれの先生、戦中のことを教えてください。

高木 米が配給制で、昭和二十年には週に二・三回しか米が食べられなかった。だからふかしたイモやかぼちゃをご飯に混ぜ、量を増やしていたんです。当時は育ち盛りだったからいつも腹をすかせていたな。白いご飯をお腹一杯食べるのが夢でした。

藤井 今聞くとおいしそうですね。

高木 かぼちゃの食べすぎで、黄だんでもない



生年月日 昭和6年7月19日
出身地 小樽市
出身大学 北海道大学医学部 昭和31年卒
第二外科

のに顔が黄色い人がたくさんいました。中学二年の四〜九月まで、授業そつちのけで、仁木の果樹農園で援農したことも忘れられない。りんごの袋かけはうまかった(笑)。八月十五日の敗戦の玉音は、仁木の小学校校庭で聞いてショックを受けました。

私の通っていた旧制小樽中学(現・小樽潮陵高校)は古い校舎でね、冬になるとトイレに雪が降り積もるんです。GHQからオンボロ校舎では男女共学にできないとお達しがあったため、共学になるのが遅かった。

初めての男女共学は大学に入ってから。クラス五十人中、女性は三人くらいでした。たまに話しかけられると、女性への接し方が分からないから赤面しちゃってね(笑)。

藤井 学生時代、スポーツの経験は？
高木 戦後はGHQの指導で武道が禁止され、柔道部から軟式テニス部に変更。小樽高校の二・三年時に、全道高校大会で二連覇しました。

●混沌とした社会
将来が想像できなかった

藤井 先生が医師を目指された動機は？

高木 私が北大理類に入学した昭和二十五年ごろは社会がようやく復興し始めたところで、産業界も荒廃しており、入社できる会社が無かった。だから医師なら何とかなるかなと…。

藤井 外科を選ばれたきっかけは？

高木 子どものころから工作が得意でね。小学生の時、小樽の模型飛行機コンテストで優勝したこともあります。竹と木で作った骨組みに紙を張って、ゴムの動力で飛ばすんです。羽根の取り付け位置で飛行距離が変わるから、その微調整が難しかったです。

藤井 先生の研究テーマを教えてください。

高木 超低体温下での長時間血行遮断です。犬の体温を十度まで下げ、約二時間血行を遮断することに成功しました。

当時、第二外科には「低体温、血管」「人工心肺」「消化器」の三つの研究グループがあつて、各チームで競争して研究したものです。私の研究は、この手段を用いて心臓移植、心臓同種移植の研究を行っていた。同種移植の臨床成功例は日本では最初、世界的にも二例目で、恩師の杉江三郎教授が大変喜んでおられたことは忘れられない。

●情熱を注いだ病院新築

藤井 先生が名誉院長を務められる小樽協会病